

1 きつねの手ぶくろ

ずっと昔、まだ物心つくかつかないかのころ、お母さんやお父さんに読んでもらった絵本を覚えているだろうか。新美南吉『手ぶくろを買いに』もそんな絵本の一冊だったかもしれない。雪が降り積もった寒い冬のお母さんぎつねが子ぎつねに手ぶくろを買ってやりたいと人間の町に行く。そこでお母さんぎつねは子ぎつねの片手を人間の手に変えてやり、白銅貨を渡してお店に手ぶくろを買いに行かせるんだ。あれほど人間の手のほうを出しなさい、と言われるのに、子ぎつねは肝心なところで店主に逆の手、つまりきつねの手を見せてしまう。でも、店の主人は白銅貨をかちかちと言わせて本物であることを確かめて、子ぎつねにちゃんと手ぶくろを渡す。子ぎつねを心配して待っていたお母さんぎつねは、その話を聞いて「人間ってそんなにいいものかしら」とつぶやく。そんな話だ。

この話を聞いて、店の主人がやさしくてよかったね、とほのぼのすることももちろんOKだ。しかし、店の主人がやさしくなかったらどうなっていたのだろうか。子ぎつねはつかまって、マフラーにされてしまったのだろうか。子ぎつねがマフラーにされなかったのは、店の主人がたまたまやさしかったからではない。店の主人が市場倫理をわきまえていたからだ。白銅貨をもらった主人は、それが本物であったから手ぶくろを代わりに渡したのだ。

あるべき市場の姿がここにある。主人は子ぎつねが人間でなかったからといって分け隔てをするようなことはしない。対価をきちんと払えば子ぎつねだってお客様だ。市場には、姿かたちで分け隔てをされないという安心感がある。

さあ、ここでぼくなりにお話の続きを試みよう。あるとき、この町の偉い人がきつねにだまされたと騒ぎ出した。どうやら酔っ払って月の光に照らされた落ち葉を金貨と間違えた。それで、自分の持ち物を全部きつねにあげてしまつて、代わりに落ち葉の金貨を受け取ったんだ。もちろん、本当はただ単に自分で川に捨ててしまっただけかもしれない。酔いがさめて天にとどくくらい髪の毛が逆立ってしまったこの偉い人はお触れを出す。今後、きつねからお金を受け取ることを禁止する。受け取った者は処罰する。また、そのようにお金を持ってきたきつねはつかまえること、とね。

さて、そんなお触れが出たこととは知らないまま、いつの間にか大きくなつた子ぎつねが、ああ、いや子ぎつねじゃない、もうお父さんぎつねだ。そのお父さんぎつねが、ある寒い冬の日自分の子どものために手ぶくろを買ってあげようと思ひ立つ。昔はね、人間の手に変えてもらつて手ぶくろを買いにいった

んだ。だけど、そんな必要はもうないんだよ。お父さんぎつねはそう言って、白銅貨を二枚、ぎつねに渡すんだ。

ぎつねはおそろおそろ、でもお父さんを信じて、お店に行く。だけど、お店の主人はお触れがあるからと手ぶくろを売ってくれないんだ。ここにいるとつかまるからお行き、と店の主人に言われたぎつねは、店先でぐずぐずしている。そうこうしているうちに町の偉い人が狩人を従えてやってきた。あ、やあ、あそこにいるのは白銅貨を手にしたぎつねだぞ、きつと木の葉のお金に違いない。追いかける、つかまえろ、撃つてもかまわん。

…ズダーン…

☆☆☆

経済問題でもゲーム理論は大活躍する。市場は大きなゲームフィールドで、ぼくたち消費者や企業はそこでいろいろな人や企業と関わりながらさまざまな活動を行うプレイヤーだからだ。不況になるたびに、その市場というフィールドで嵐が吹き荒れているから市場を規制しようという議論が盛んになる。ぼくは少し心配だ。市場でモノを売ることができるとして人々を制限したとしてみよう。たとえば、今現在すでにお店を開いている人はいいが、そうでない人は新しくお店を開いてはいけません、というような規制だ。

そうすると、お店をすでに持っている人は新しい競争を心配しなくてもいいから、少し高い値段でモノを売ることができる。店がつぶれる心配もなくなつて万々歳だ。それを見た偉い人が倒産も減って景気がよくなったと、さらに他のモノを売っている店についても同じような規制をする。これもまずまずだね、ということ、多くの市場で同じように規制の網をかけたとする。

気がついてみると、新しくお店を出そうにも売れるモノがなくなる。これらががんばって新しいお店を出そうという人は困ってしまう。すでにお店を持っている人とまだ持っていない人の間に格差が作られてしまうのだ。

市場というゲームに参加できるプレイヤーはもう決まっていますから、あなたはプレイできません、と言われてしまうようなものである。(中略)

格差問題の本質は、年功制によって組織に守られている正社員と、市場で戦い続けなければならない非正社員との間に昔からある「身分差」が、長期経済停滞の下で表に出てきたことにある。

そして、日本の場合、法制度がこの格差を助長している。OECDが現行の雇用法制や過去の判例などを集めて比較したことによって改めて浮き彫りになったのが、日本における正社員と非正社員の保護度合の差である。ごく大雑把に言えば、米国は正社員、非正社員ともに簡単に解雇でき、EU諸国はともに

簡単には解雇できない。それに対して、日本では正社員の解雇はEU並みに困難だが、非正社員は米国寄りで比較的解雇しやすい。

この実情を踏まえ、雇用保護法制における格差を減らす必要性では意見の一致が見られるが、正社員の解雇要件を軽減すべきか、非正社員の解雇要件を厳しくすべきかという点では意見が大きく分かれている。

労働者保護への社会的要請は高いが、その動きの多くが、大企業を想定して議論されている。中小企業では、その存続がかかっている以上、「非正社員を正社員として雇え、無給の残業や休日出勤をすべてなくせ」と言っても難しいのである。

大企業に働く人や経営者といった勝ち組の人々は負け組のことはなかなかわからない。強い人こそ身内優先主義を捨て、宮沢賢治の言葉に体现されているような「世界がぜんたい幸福にならないうちは、個人の幸福はあり得ない」という東洋的宇宙観を持つべきかもしれない。強い人も今の社会・経済制度の中で強い立場に置かせてもらっているだけであり、「本当の幸い」は格差が解消しなければ得られないという認識が必要である。これは単なる精神論ではない。正社員と非正社員の間に社会的な格差が大きいと、正社員は非正社員に転落することを恐れて、働きづめに働くことを余儀なくされ、最悪の場合過労死に追い込まれるだろう。格差は非正社員だけでなく、正社員をも追い詰めることになるのである。

ただでさえ、大企業と中小企業、正社員と非正社員との間には格差が生じがちである。雇用保護法制によってこの両者をさらに分断している日本。その格差を解消しようと非正社員の解雇要件を厳しくすれば非正社員にすらなれない人が出てくるであろう。企業は従業員をリストラし、労働組合は働けない人を排除するが、国家は国民をリストラすることも排除することもできない。できるだけ多くの人々を陽の光で包むために、税制、社会保障も含めたシームレスの制度の構築が急がれる。

☆☆☆

実は『手ぶくろを買いに』には前ふりがある。お母さんぎつねがまだ子どもだったころ、いたずらな友だちが農家のあひるを盗もうとしてみつかり、命から逃げてきた、という経験があるのだ。お母さんぎつねには、あのときと今回の人間の対応の違いがよくわかっている。市場のルールを守らなかつたきつねは痛い目に遭うし、それを守ればたとえきつねでもお客様として扱ってもらえる。それが市場のいいところであり、市場というゲームのルールを知らない人には、市場への参加に当たって、そのルールをきちんと教えておく必要

がある。わが国では、市場のしくみやルールについて学ぶ場が少ないが、これこそ実地での訓練のみならず、高校や大学できちんと学ぶ必要があるのである。そうそう、あのとき鉄砲で撃たれた子ぎつねはどうなっただろう。幸い、弾はそれ、子ぎつねは山へ戻ることができた。でも、驚いた拍子に白銅貨を落としてしまい、おまけに受けた仕打ちにショックを受けてしばらく寝込んでしまった。

心の傷がようやく癒えたころ、一人の人間の男が山へやってきた。どうも男は子ぎつねを探しているらしい。鉄砲もかっいでいる。男は子ぎつねの足跡を見つけた。

「どうもこの辺りらしいな」

そう言いながら男が顔を上げると、子ぎつねと一瞬目が合った。

「しまった」

子ぎつねはあわてて身を隠した。男は笑って、ポケットから何か取り出すと、そっとぶなの木の根元に置いて立ち去った。

男が見えなくなつてから、子ぎつねがおそろる木々の根元に近づいてみると、そこにはひとそろいの手ぶくろと紙切れと白銅貨一枚が置いてあった。そして、紙切れには汚い字でこう書いてあった。

「お品ものとおつりです。」

お買いあげ、ありがとうございます。

店主」

☆追加資料

■「長谷寺参詣男蛇をもちて大柑子に替ふる事」(『古本説話集』下 五十八)(『宇

治拾遺物語 古本説話集』新 日本古典文学大系 一九九〇 岩波書店)より

今は昔、父も母も、主も、妻も子もなくて、ただ一人ある青侍有りけり。すべき方もなかりけるままに、「観音、助けさせ給へ」とて、長谷に参りて、御前にうつぶし臥して申しけるやう、「この世にかくてあるべくは、やがてこの御前にて干死に死なん。又おのづからなる便りもあるべくは、そのよしの夢見ざらん限りはまかり出づまじ」とて、うつぶし臥したりけるを、寺の僧見て、「こはいかなる物の、かくては候ふぞ。物食ふ所見えず、かくてうつぶし臥したれば、寺のため穢らひ出で来て、大事なりなん。誰を師にはしたるぞ。何処にてか物は食ふ」など問ひければ、「かく便りなき人は、師取りもいかにしてかし侍らん。物食ぶる所もなく、あはれと申す人もなければ、仏の給はん物を食べて、仏を師と頼みたてまつりて候ふなり」と答へければ、寺の僧ども集まりて、「この事、いと不便のとなり、寺のために大事なり。観音をかこち申す人にこそあめれ。

これ集まりて養ひて候はせん」とて、かはるがはる物を食はせければ、持て来たる物を食ひつつ、御前に立ち去らず候ひける程に、三七日になりにけり。

三七日の果てて明けんずる夜の夢に、御帳より人の出で来て、「この男の、己れが前の世の罪の報いをば知らで、観音かこち申して、かくて候ふこと、いとあやしきことなり。さはあれども、申すことのいとほしければ、いささかなること計らひ給ひをはりぬ。まづ速やかにまかり出でね。まかり出でんに、何にまれ、彼にまれ、手に当たらん物を取りて、捨てて持たれ。それぞ、きうちが給はりたる物。疾く疾くまかり出でよ」、追はると見て、起きて、「あはれ」と言ひける僧のもとに寄りて、物うち食ひて、かさ蓑かけて、まかり出でける程に、大門につまづきて、うつぶしに倒れにけり。

起き上がりたるに、手にあれにもあらず握られたる物を見れば、藁の筋といふ物の、ただ一筋が握られたるを、「賜ぶ物にてありけるにやあらん」と、いと物はかなく思へども、「仏の謀らせ給ふやうあらん」、これを手まさぐりにしつつ行く程に、虻の一つぶめきて、顔のめぐりにあるを、うるさければ、木の枝折りて払ひ捨つれども、なほただ同じ様にうるさくぶめきければ、手に捕らへて、腰をこの藁の筋してひき括りて持たりければ、腰を括られて、ほかへはえ行かで、ぶめき飛びけるを、長谷に参りける女車の、前の簾をうち被きてゐたる児の、いとうつくしげなるが、「あの男の持ちたる物は何ぞ。かれ乞ひて、我に得させよ」と、馬に乗りて供にある侍に言ひければ、その侍、「かの男、その得たる物、若君の召すに、参らせよ」と言ひければ、「仏の賜びたる物に候へど、かく仰せ言候へば、参らせ候はん」とて、取らせたりければ、「この男、いとあはれなる男なり。若君の召す物を、心やすく参らせたること」と言ひて、大柑子を、「これ、喉渴くらん、食べよ」とて、三つ、いと香ばしき陸奥国紙に包みて、取らせたりければ、取り伝へて、虻取りける侍、取らせたりければ、「藁一筋が大柑子三つになりぬること」と思ひて、木の枝に結び付けて、肩にうち懸けて行く程に、「故ある人の、忍びて参るよ」と見えて、侍などあまた具して、徒歩より参る女房の、歩み困じて、ただ垂りに垂りゐたるが、「喉の渴けば、水飲ませよ」と、ゆき入りなんずる様にすれば、供の人々手感ひをして、「近く水やある」と走り騒ぎ、求むれども、水もなし。「こはいかがせんずる。御旅籠馬にや入りにたる」と問へど、遥かに後れたりとて見えず。ほとほとしき様に見ゆれば、まことに騒ぎ惑ひて、為扱ふを見て、「喉渴きて騒ぐ人よ」と見えてければ、やをら歩み寄りたるに、「ここなる男こそ、水のあり所は知りたるらめ。この辺近く、水の清き所やある」と問ひければ、「この四五町が内には、清き水候はじ。いかなることの候ふにか」と問ひければ、「歩み困ぜさせ給ひて、御喉の渴かせ

給ひて、「水召さん」と仰せらるるに、水のなきが大事なれば、尋ぬるぞ」と言ひければ、「不便に候ふことかな。水候ふ所は遠きなり。汲みて帰り参らば、程経候ひなん。これはいかが」とて、包みたる柑子を三つながら取らせたれば、喜び騒ぎて食はせたれば、それを食ひて、やうやう目を見開けて、「こはいかなりつることぞ」と言ふ。「御喉渴かせ給ひければ、「水飲ませよ」と仰せられつるままに、御殿籠り入らせ給ひつれば、水求め候ひつれども、清き水も候はざりつるに、ここに候ふ男の、思ひかけぬに、その心を得て候ひけるにや、この柑子を三つ奉りたりつれば、参らせたりつるなり」といふに、この女房、「我は、さは、喉渴きて絶え入りたりけるにこそ有りけれ。「水飲ませよ」と言ひつるばかりはおのづから覚ゆれど、その後の事は、いかにもつゆ覚えず。この柑子得させざらましかば、この野中にて消え入りなまし。嬉しかりける男かな。この男はまだあるか」と問へば、「かしこにまだ候ふ」と言へば、「その男しばしあれと言へ。いみじからんことありとも、絶え入り果てなましかば、かひなくこそ止みなましか。この男の嬉しと思ふばかりの事は、かかる旅にてはいかがせんずる」とて、「食物などは持て来たるか。物など食はせてやれ」と言へば、「かの男、しばし候へ。御旅籠馬など参りたらんに、物など食べてまかれ」と言へば、「うけ給はりぬ」とて居たる程に、旅籠馬や皮籠馬など来着きたり。「などかく遙かに後れて、遅くは参るぞ。御旅籠馬などは、常に先に立ち候ふこそよけれ。頓の事などもあるに、かく後るるはよきことか」など言ひて、やがてそこに屏幔引き、畳どもなど敷きて、「水ぞ遠かなれど、困せさせ給ひにたれば、人の召し物はここにて召すべきなり」とて、とまりぬ。

夫ども遣りなどして水汲ませ、食物し出だしたれば、その男に、いと清げに物して食はせたり。物を食ふ食ふ、ありつる柑子を、「何にならんずらむ。観音導かせ給ふことなれば、よも空しくてはやまじ」と思ひたる程に、白くよき布を三尺取り出でて、「これ、あの男に取らせよ。この柑子の喜びは、言ひ尽くすべき方もなければ、かかる旅にては、嬉しと思ふばかりの事はいかがはせむずる。これはただ心ざしの初めを見するなり。京のおはしまし所はそこそこになんおはします。かならず参れ。この柑子の代はりの物は賜ばんずるぞ」と言ひて、布三尺を取らせたれば、喜びて、布を取りて、「藁筋一つが布三尺になりぬること」と思ひて、脇に挟みてまかる程に、その日は暮れにけり。

道面なる人の家に泊まりて、明けぬれば、鶏とともに起きて行く程に、日さし上がりて、辰の時になる程に、えもいはず良き馬に乗りたる人、この馬を愛しつつ、道をも行きやらず振る舞はする男会ひたり。「まことにえもいはず馬かな。これを千段がけなどはいふにやあらん」と見る程に、この馬のにはかに倒

れて、ただ死にに死ぬれば、主、我かにもあらぬ気色にて、下りて立ちたり。惑ひて鞍下ろしつ。「いかがせんずる」と言へども、かひなく死に果てぬれば、手を打ち、あきましがり、泣きぬばかりに思ひたれど、すべき方なくて、あやしの馬のあるに鞍置き換へて、「かくてここにありとも、すべきやうもなし。我等は往なん。これ、ともかくもして、引き隠せ」とて、下衆男一人を留めて往ぬれば、この男見て、「この馬は、我が馬にならむとて死ぬるにこそあめれ。藁筋一筋が、柑子三つになりたりつ。柑子三つが、布三疋になりたり。この布の、この馬になるべきなめり」と思ひて、歩み寄りて、「この男に言ふやう、「こはいかなりつる馬ぞ」と問ひければ、「陸奥国より、この馬をただ据ゑて上らせ給ひつる馬を、よろづの人の欲しがりて、価も限らず買はんと申しつるをも、放ち給はざりつる程に、今日かく死ぬれば、その価一疋をだに取らせ給はずなりぬ。己れも「皮をだに剥がばや」と思へど、「旅にてはいかがはせむずる」と思ひて、目守り立ちて待るなり」と言ひければ、「そのことなり。いみじき馬かなと見侍りつる程に、はかなくかく死ぬることの、命ある物はあさましきなり。皮はぎても、忽ちに、え干しえ給はじ。己れはこの辺に侍れば、皮はぎて使ひ侍らん。得させておはしね」とて、この布を一疋取らせたれば、男、「思はずなる所得したり」と思ひて、「思ひもぞ返す」とや思ふらん、布を取るままに、見だにも返らず、走りて往ぬ。

男、よく遣り果てて後に、手かき洗ひて、長谷の御方に向かひて、「この馬生けて給はらん」と念じ入りたる程に、この馬、目を見開くるままに、首をもたげて起きむとしければ、やをら手をかけて起こし立てつ。嬉しき事限りなし。「後れたる人もぞ来る。ありつる男もぞ帰り来る」など、危ふく覚えければ、やうやう隠れの方へ引き入れて、時変はるまで休めて、もとのやうに心地もなりにければ、人のもとに引きもて行きて、その布一疋して、轡やあやしの鞍に替へて、馬に置きて、京さまに上る程に、宇治辺りにて日暮れにければ、その夜の許に泊まりて、いま一疋の布して、馬の草やわが食物などに替へて、その夜は泊まりぬ。

翌朝、いと疾く京さまに上りければ、九条辺りなる人の家に、物へ行かむずるやうにて、立ち騒ぐ所あり。「この馬、京に率て行きたらんに、見知り人ありて、「盗みたるか」など言はれんもよしなし。やをらこれを売ればや」と思ひて、「かやうの所に馬など要する物ぞかし」とて、下り走りて、寄りて、「もし馬などや買はせ給ふ」と問ひければ、「馬をがな」と願ひ惑ひける程に、この馬を見て、「いかにせん」と騒ぎて、「ただ今絹などなむなきを、この鳥羽の田や米などには替へてんや」と言ひければ、「中々絹よりは第一の事なり」と思ひて、

「絹布こそ要には侍れ。己れは旅なれば、田などは何にかはせんずると思ひ給ふれども、馬の御要あるべくは、ただ仰せにこそは従はめ」と言へば、この馬に乗りこころみ、馳せなどして、「ただ思ひつるさまなり」と言ひて、この鳥羽の近き田三丁、稲少し、米など取らせて、やがてこの家を預けて、「己れ、もし命ありて、帰り上りたらば、その時に返し得させ給へ。上らざらむ限りは、かくて居給ひつれ。もし又命絶えて亡くもなりなば、やがて我が家にし給へ。子も侍らねば、とかく言ふ人もよも侍らじ」と言ひて、預けて、やがて往にければ、その家に、得たりける米稲など取り置きて、替はり居にけり。ただ一人なりけれど、食物ありければ、傍らなりける下衆など出で来て、使はれなどして、ただありつきにありつきにけり。

二月ばかりの事なりければ、その得たりける田を、半らは人に作らせ、いま半らは我が料に作らせたりけるが、人の方にとて作りたりける、良けれども、例のままにて、己れが料と名付けたりける、ことのほかに多く出で来たりければ、多く刈り置きて、それうち始め、風の吹きつくるやうに徳つきて、いみじき人にてぞありける。その家主も音せずなりにければ、その家もわが物にて、ことのほかに徳ある物にてぞありける。

【現代語訳】

今は昔のこと、父母も、主人も、妻子もなくて、天涯孤独な身分の低い若侍がいた。どうしようもなかったので、「観音様、お助けください」と長谷寺に参って、御前にうつむけに伏して申すには、「この世にこのように貧乏でなければならぬ運命なら、このまま御前で餓死してしまおう。また、もし何かのきっかけに自然に金品の便宜が得られるはずならば、その旨の夢を見ない限りはここを出ますまい」と言つて、うつむけに伏しているのを、寺の僧が見て、「これはいったい何者が、こんなふうにいるのか。物を食う所も見えず、こうして伏したままになつていたら、寺のために穢れも出てきて、大事になるだろう。誰を師としているのか。どこで物を食べるのか」など尋ねたところ、「こんなよるべのない貧しい人間に、師などどうしておりましようか。物を食べる所もなく、かわいそうにと言つてくれる人もないから、仏のくださる物を食べて、仏を師とお頼み申しているのです」と答えたので、寺の僧たちが集まって、「これはたいそう困ったことで、寺のためによくない。観音様のせいにして恨み、不平を申す人なのだ。皆で力を合わせてこの男を養つてやろう」と言つて、かわるがわる物を食べさせたので、持つてくる物を食べながら、御前を立ち去らずにいるうちに、二十一日になつてしまった。

二十一日が終わって夜が明けようとする夢に、御帳から人（観音の使い）が出てきて、「この男の、自分が貧しいのは前世で犯した罪の報いであるのを知らず、観音を恨み、不平を申してこうしていること、まことにけしからぬことである。そうではあるが、申すことがたいへん気の毒なので、観音様は少しばかりのことをお取り計らいくださった。まずすぐに退出せよ。退出の際に、何にもせよ、手に触れる物を取って、捨てずに持って行け。それこそ、お前がいただいた物。早々に退出せよ」と追われると見て、起きて、「かわいそうに」と言った僧のもとに行つて物を食い、傘蓑を背にかけて、退出したときに、大門につまづいて、うつぶせに倒れてしまった。

起き上がったときに、手に何気なく握つた物を見ると、わらしべというもののただ一本が握られていたのを、「仏のくださる物だったのであろう」と、実につまらないと思つたが、「御仏が何かお考えくださっていることがあるのだらう」と、これを手でもてあそびながら行くうちに、虻が一匹ぶんぶんとうなつて、顔の周りを飛ぶのがうるさいので、木の枝を折って追い払つたが、やはり同じようにうるさくぶんぶんいうので、つかまえて虻の腰をこのわらしべでくくつて持っていたので、虻は腰をくくられてよそへは飛べず、ぶんぶん飛び回っていた。すると長谷寺に参詣する女車の、前の簾をかぶるようにして外を見ていたたいへん可愛らしい子どもが、「あの男の持つている物は何か。あれを求めて私に得させよ」と、馬に乗って供をしている侍に言ったので、その侍は、「その男、その持つている物を、若君がお召しなので、差し上げよ」と言うので、「仏がくださった物ですが、こういうせつかくの仰せですから、差し上げましょう」と進呈すると、「この男はまことに感心な男だ。若君のお召しになる物をすぐに進呈するとは」と言い、大きなみかんを、「これを喉が渇くときに食べよ」と言つて、三つ、上等な陸奥紙に包んで与えられたので、取り次いで、虻を取つた侍が与え取らせたところ、「わら一筋が大きなみかん三つになつたことよ」と思つて、木の枝に結び付けて肩に掛けて行くうちに、「由緒ある人が、お忍びで参詣することよ」と見えて、侍などを大勢連れて、歩いてくる女房で、歩き疲れて、くたびれていた人が、「喉が渇いたから、水を飲ませよ」とまさに息が絶えそうなので、お供の人たちは慌てふためき、「近くに水があるか」と走り騒いで探す、水はない。「これはどうしたものか。もしかすると御旅籠馬（旅の食糧や手回り品を運ぶ馬）にあるのではないか」と聞くが、ずっと遅れていると言つて見えない。もう死にそうな様子に見えるので、本当に騒ぎうるたえて、途方に暮れるのを見て、「喉が渇いて騒いでいる人だな」と思い、静かに歩み寄ると、「この男はきつと水のありかは知っているだろう。この近所に水のきれい

な所があるか」と聞くので、「この四、五町のうちにはきれいな水はありませんまい。いったいどういうわけのですか」と尋ねると、「歩きお疲れになられて、御喉がいたくお渴きになり、『水が欲しい』とおっしゃられるが、水のないのが大事なので探しているのだ」と言ったので、「お気の毒なことですね。水のありかは遠いです。汲んでくれば時間がかかるでしょう。これはいかがですか」と、包んであるみかんを三つとも差し出すと、大喜びして食べさせると、それを食べてようやく目を見開いて、「これはいったいどうしたことか」と言う。「御喉がお渴きになり、『水を飲ませよ』とおっしゃったまま気絶なさいましたので、水を探しましたが、きれいな水もなかったときに、ここにいる男が、思いもかけずその事情をわかってくれたのでしようか、このみかんを三つ献上しましたので、差し上げたのです」と言うと、この女房は、「私はそれで喉が渴いて気を失ってしまったのですね。『水を飲ませよ』と言っただけは覚えていますが、その後のことは、少しも覚えていません。男がこのみかんを私に得させなかったなら、この野中で息が絶えたでしょう。うれしいお方ですこと。この男はまたいますか」と聞く。「あそこにまだおります」と答える。「その人、しばらく居よと言いなさい。どんなにありがたいことがあっても、死んでしまつたら、何の甲斐もなくなってしまうでしょう。この男がうれしいと思うほど存分なことは、こういう旅先ではどうしてできませんか」と言つて「食べ物を持ってきてありますか。食べさせてあげなさい」と言う。そこで、「おまえ、しばらくここにおいでなさい。御旅籠馬など着いたら、食事をして行け」と言うので、「承知いたしました」と控えているうちに、旅籠馬や皮籠馬（参籠の供え物などを運ぶ馬）などが到着した。「なぜこんなにずつと遅れて来るのか。御旅籠馬などは、いつも先にいるのがいいのだ。急な用事などもあるし、こんなに遅れて良いものか」などと言つて、すぐに幔幕を張り、畳むしろなどを敷いて、「水のありかは遠いが、お疲れになつたから、ご主人様のお食事はここでお取りになるのがよい」と、とまった。

人夫などを行かせして水を汲ませ、食べ物を出したので、その男においしそに食べ物を用意して食べさせた。物を食べながら、さつきのみかんを、「何になるだろう。観音様のお取り計らいになることだから、まさか無駄には終わるまい」と思つていたところ、白くよい布を三段取り出して、「これをあの男に与えよ。このみかんの喜びは、言い尽くすべき手立てもないが、こういう旅にあつては、男がうれしいと思うほどのことはどうしてできませんか。これはただ感謝の気持ちのしるしです。京のお住まいはこれこれです。必ず来なさい。このみかんのお礼をきつといたしましょう」と言つて、布三段を与えたので、喜んで

布を取り、「わら一筋が布三段になったことだ」と思つて、小脇に挟んで行くうちに、その日は暮れてしまった。

道ばたにある人の家に泊まつて、夜が明けると、鳥の声とともに起きて行くうちに、日がさしのぼってくる、午前八時頃、何とも言えず立派な馬に乗った人が、この馬をいたわつて、ゆつたりと歩ませるのに会つた。「ほんとうにすばらしい馬だなあ。これこそ布千段に値する名馬などというのであろうか」と見ていると、この馬がにわかになつて倒れてころつと死んでしまったので、主人は茫然とした様子で、下りて立っていた。慌てふためいて家来たちも、鞍をはずした。

「どうしよう」と言うが、むなしく死んでしまったので、手を打つて、驚き力を落として、今にも泣かんばかりの思いであるが、どうしようもなく、ありあわせの粗末な馬に鞍を置き換えて、「こうしてここにいでもどうしようもない自分らが行こう。この馬をどうとも隠しておけ」と言つて、下男を一人残して主人は去つたので、この男が見て、「この馬はきつと自分の馬にならうとして死んだのもあろう。わら一筋がみかん三つになつた。みかん三つが布三段になつた。この布が今度は当然馬になるらしい」と思つて歩み寄り、この下男に、「これは一体どうした馬なのです」と聞いたところ、「陸奥国から、この馬をただ一途に身近に置いて大切に連れてこられた馬で、誰もかもが欲しがつて、値段に糸目もつけず買おうと申し入れても、惜しんでお手放しにならなかつたが、今日こうして死んだので、その値は少しもお取りにならずに終わってしまった。自分も『せめて皮でもはぎたい』と思うが、『旅先ではどうしたものか』と思つて、こうして見守り立っているのです」と言つたので、「実はそのことです。立派な御馬よと見ていましたが、はかなく死んでしまい、命あるものは嘆かわしいことです。皮をはいでも、旅先ではすぐにお干しにはなれますまい。自分はこのあたりの者ですから、皮をはいで使ひましょう。私に譲つておいでなさい」と、この布一段を与えたので、下男は「思いがけず得をした」と思い、「考え直したら困る」と思つたのか、布を取るやいなや振り返りもせず走り去つた。

男は、下男を十分やり過ぎた後、手を洗い清め、長谷の御方に向かつて、「どうぞこの馬を生き返らせていただきたい」と祈っているうちに、この馬が目を見開くとすぐに、頭をもたげて起きようとしたので、そつと手をかけて起こした。うれしいことこの上もない。「遅れて来る従者があるかもしれない。さっきの下男が来るかもしれない」と危ぶまれたので、そろそろと物陰の方に引き入れて、しばらく時がたつまで休めて、もとのように元気になつたので、人のもとに引いて連れて行き、その布一段で、轡や粗末な鞍に換えて馬に置いて、京の方へ上るうちに、宇治のあたりで日が暮れてしまつたので、その夜はある

人のもとに泊まり、もう一段の布で、馬の草や自分の食べ物などに換えてその夜は泊まった。

翌朝、非常に早く京の方へ上っていくと、九条あたりの人の家で、どこかへ行こうとする様子で、立ち騒いでいる所がある。「この馬を京に引いていった場合、見知っている人がいて、『盗んだのではないか』と言われるのもつまらない。こっそりこれを売りたいものよ」と思つて、「こういうところにこそ馬などきつと必要な物だろう」と思い、馬から下りて急いで近寄つて、「もし、馬などお買いになりませんか」と聞くと、「馬が欲しい」と強く希望していたところなので、この馬を見て、「何とか手に入れたものだ」と騒いで、「ただ今絹などはないが、この鳥羽の田や米などには換えてくれないか」と言つたので、「かえつて絹よりはそのほうが何よりのことだ」と思うが、「絹の布こそほんとうに必要です。私は旅の者ですから、田などもらつても何になろうかと思ひますが、馬の御用があるのでしたら、ただ仰せの通りに従いましょう」と言つたので、この馬に試し乗りして、走らせなどして、「まったく思つたとおり良い馬だ」と言つて、この鳥羽の近くの田三町と稲少し、米などを与えて、そのままこの家を預け、「自分がもし命あつて京に上り帰つたら、その時に返してください。上つてこない限りは、そのまま住んでいらつしやい。もしまた、命絶えて死んでしまつたら、そのまま自分の家にしてください。私には子どももないから、とやかく申す人もありませんまい」と言つて預け、そのまま出かけたので、その家にもらつた米や稲などを取つておき、代わりに住んだ。ただ一人ではあつたが、食べ物も十分あることでもあり、近辺の下人たちがやつて来て、使われたりして、そのままこの家に住みついてしまつた。

二月頃のことであるから、その手に入れた田を半分は人に作らせ、もう半分は自分のために作らせたが、人の方の分もよくできたものの、それは普通並みであり、自分の分として作つたのは、意外に多く収穫があつたので、稲をたくさん刈つておき、それを手始めとして、風が物を吹き寄せるように財産が増えて、たいへんな大金持ちになつた。そのもとの家主も、何の音沙汰もなくなつてしまつたので、その家も自分の物として、ことのほかに榮えたとかいうことである。